仲間と試行錯誤する過程で、
自分の見方や発想を広げながら自信をもち、
自分らしく主体的に表現する児童の育成

―　２年「たのしくうつして～かたがみをつかって～」の実践を通して　―

１　主題設定の理由
２　研究内容
　（１）めざす子ども像
　（２）仮説とてだて
　（３）題材構想
３　抽出児童について
４　実践と考察
５　成果と課題

第６分科会
美術教育

大道　士子　（豊田・衣丘小）

研究の概要報告

１　本次教研へのとりくみ状況

「子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫」と「コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践」の二つの柱のもと 17 本の実践が報告された。

一つめの柱では小学校で、具体的な表現技法などの効果的な知識・技能の指導を取り入れた絵に表す活動、試す場や時間を十分に取った墨で表す活動、光を扱う造形遊びでの学習の動機づけやその持続に配慮した活動、地域にある「色」から作成した色辞典をもとに展開された絵に表す活動、学習構成による素材提示の順序や環境を工夫した立体・写真に表す活動の 5 件が発表された。中学校では、著名な肖像画を活用した自画像の絵画の活動、ICT 端末を効果的に活用した文様制作の活動、素材・古典技法との向き合うことを大切にしたモザイク制作の活動の 3 件が発表された。

次の二つめの柱では、小学校で児童間のかかわりあいを積極的に促す場の工夫をした楽器製作や装飾する活動、色みず遊びにおける児童間のかかわり場や学習構成を工夫した授業、注目する観点が共通するグループ構成での学びの深まりを促したアニメーション制作の活動、仲間と行う試行錯誤の場によって「自信」へ繋げた版に表す活動、具体的な相手（ペア学年）を対象としたかかわりによって学びを深めた活動、鑑賞活動におけるかかわりを起点に造形遊びなどへの学習を広げた授業、友だちとの対話を通して、「ことば」を介し自分らしい意味や価値を造形的に見出させようとした授業、学校全体で心寄せ合う対話の活動を軸にしたさまざまな活動の実践研究、中学校での造形要素を観点にした古代壁画の鑑賞活動における、対話による学びの広がり・深まりを促した授業など 9 件の報告がなされた。

質疑・討論では、子どもの思いや考えを大切にする題材や指導の工夫、発想・構想を造形的に表すことへのてだて、知識・技能などの適切な指導・支援、学習の認識や共有をするための言語化、中間・相互鑑賞の位置づけや意義についての討議などがあった。

２　本次研究の主な主題

総括討論の場では、『「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと」～子どもたちのゆたかな学びのために～』をテーマとして、いくつかトピックに分けてグループ討論や全体での共有が行われた。各先生方の美術教育に対する真摯な姿勢が強く熱く感じられた。また、美術教育を通して「つくること」「みること」、人や環境と「かかわること」、「いきること」の大切さを子どもたちへ伝えたい主旨の討論であった。助言の場では助言者から、子どもの学びの姿を想像し、教材開発・研究の大切さや面白さなどの具体的なご助言があった。

美術教育（図画工作科・美術科）の授業実践研究は、学校教育内では少数派になるかもしれないが、この教科でしか育めないこと、この教科でしか見つめ支えることができない子どもの姿がある。そのために我々は今後とも実践を積み重ねて検証し、子どもたちのゆたかな学びと明るい未来のために努力を続けていきたいものである。　　（杉林　英彦・村田　俊広）

報告書のできるまで

第７２次教育研究集会は、１０月１５日に愛知県産業労働センターで開催された。昨年度に引き続き、「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと～子どもたちのゆたかな学びのために～」をテーマに各組が実践リポートを提出した。この報告書は、助言者の先生をはじめ、関係諸先生のご指導とご協力を得て作成したものである。

助　　言　　者	杉林　英彦（愛知教育大学）	村田　俊広（知教連・知多中）
教育課程研究委員	榊原　慧太（豊川・豊小）	森田　弥生（西春・新川中）
	大島　聖矢（名古屋・明正小）	沢代　宜往（名古屋・浮野小）
	山田　索（名古屋・南陽中）	石原　正悟（尾北・岩倉中）
	小林　佳奈子（小牧・応時中）	内藤　季美（豊橋・栄小）
	浅井　優子（岡崎・葵中）	

１　主題設定の理由

２年生の本学級の児童は図画工作科が好きであり、次に何を製作するのかを聞いてくる児童もいる。友だちの作品にも興味があり、よさを素直に認める言葉をかけることができる。しかし、「自信をもって作品づくりにとりくめていますか」の質問に対し、約２５％の児童が「あまり思わない」「思わない」と答えている。これは、アイディアが思い浮かばなかったり、失敗を恐れたり、他者と自分を比べたりして自信をもてないことが原因のようである。

図画工作科は、問題解決と自己決定の連続である。そのためには、経験や試行錯誤、他者とのかかわりや遊びながら創造活動をする時間などが必要不可欠であるが、コロナ禍という未曽有の事態が重なり、児童らにはその時間があまり与えられてこなかったのではないかと推測する。そこで、遊びや体験の中からイメージを具現化させる過程を大切にし、仲間とともに何度も繰り返し挑戦できる場や、夢中になって表現したくなるような課題を設定することで、発想の力とともに、楽しんで表現できる自信につなげたいと考えた。特に苦手意識のある絵画の中でも、試行錯誤が可能な版画を扱うことで、苦手を乗り越える自信につなげていきたい。

※1「自分の見方や発想を広げ」とは、同じ技法だけではなく、より多くの技法に着目し、実践しようとする姿のことと定義する。

※2「自分らしく主体的に」とは、製作や鑑賞活動にすすんでとりくみ、友だちの作品や上手下手にとらわれずに自分の感性や表現に自信をもって製作しようとする姿のことと定義する。

２　研究内容

（１）めざす子ども像

・多様な表現の技法や見方を見つけ、つくり出す楽しさや自信を味わうことができる子。
・よりよい作品をつくろうと試行錯誤し、自分らしく主体的に製作活動にとりくもうとする子。

（２）仮説とてだて

【仮説Ｉ】

段階的に仲間とかかわり合い、試行錯誤しながら新しい技法や見方を知り、表現の多様性を互いに認め合うことで、自信をもって活動し、表現する楽しさを実感できるだろう。

〈てだて①〉いかす・自信をつける学び合い（グループ・クラスの共同製作）

一人１作品という題材だけでなく、仲間とコミュニケーションをとりながら共同製作をする体験を設定し、新しい発見をしたり考えを深めたりする場を設ける。グループの中で一つのテーマ「スマイルやさいランド」について、意見を交換しながら話し合うことにより、自分の考えをなかなかもつことができない児童も楽しく活動することができると考えた。また、友だちのよいところや工夫しているところを見つけたり、他のグループを参考にしたりすることで、自分の製作にもいかすようにする。

〈てだて②〉よいところを見つける中間鑑賞

本学級の子どもたちは１年生の図画工作「かざってなにいれよう」の学習で、製作途中で中間鑑賞（ミニ鑑賞タイム）を経験している。その結果、児童の大半が「もっとよくしたい。」という思いをもった。

今回のミニ鑑賞タイムでは、見に行く班と見られる班に前半と後半で分け、見る側は、「色」「形」「刷り方」「その他」に焦点化し、よいところをその場で伝える。その際、星の形の付箋「すてき印」をつけ、誰がどんな技法に着目できたのかを後から振り返られるようにする。

〈てだて③〉すてきわざの蓄積

刷る活動の中で、色、形、刷り方を工夫してレベルアップさせるため、授業で見つけた工夫や技を振り返るときに、「すてきわざ」として発言を蓄積していく。蓄積を振り返ることで、色、形、刷り方を意識したり、前回に出た工夫を試してみたりするなどして、レベルアップできると考える。

【仮説Ⅱ】

子どもが好きなテーマにもとづき学校行事に携わる経験をし、学級の壁を越えて評価されることで、自分らしくよりよい作品をつくろうとする主体性を育むことができるだろう。

〈てだて④〉学校行事にかかわる場の設置

本学級の児童に、「衣丘小学校のみかんが好きですか」というアンケートを実施した結果、３０人全員が「とても好き」、「好き」だと答えている。そんな児童に馴染みのある「みかん」を取り入れ、本校の伝統行事である「みかん祭り」で飾る横断幕をつくるという目的意識をもってクラス共同作品をつくる。全員で協力してつくった作品が学校に飾られる喜びや達成感を味わうことで、製作する楽しさを再確認し、もっとよい作品をつくろうとする意欲が高まると考える。

〈てだて⑤〉異学年児童・教員からの評価

異学年の児童からの意見を取り入れることで、さらなる意欲につながると考えた。感想カードを配付し、全校の児童や教員に作品の素敵なところ（ほめほめポイント）ともっとよくできるところ（のびのびポイント）を募集する。よい意見は次の個人製作にむけた自信につなげ、他の意見も多様な考え方を知るきっかけになると考える。

（３）　題材構想〈図画工作科：９時間／学級活動：１時間〉全１０時間完了

		〈関連〉	〈教員の支援〉〈評価規準〉
第一次　グループ製作　**てだて①②③**	１．いろいろな刷り方の技を見つけよう！① ○学習計画の流れをつかむ。 ○参考作品を見て、刷り方の技法について話し合う。 ・型を切って、その上から色をつけて刷れるんだな。 ・２色の色でも刷れそう。 ・型を重ねて刷っても面白そう。 ２．スマイルやさいランドをつくろう！②【③本時】④ ○テーマ「スマイルやさいランド」について、グループで型紙の形や色、配置などを相談しながら、型紙を製作する。 ・ぼくたちの班は、生活科で育てた野菜５種類を刷ろう。 ・フルーツいっぱいの畑がいいかな。 ○刷る際のルールや注意点を知る。 ○刷る際のルールや注意点を振り返る。 ○班で協力しながら模造紙いっぱいに刷って作品をつくる。 ○ペアグループの作品を鑑賞し、型紙の形や色、刷り方などの技法のよさや工夫（すてきわざ）を見つける。 ・ブドウは一つの型があれば、何粒も繰り返して刷れるね。 ・２色のスポンジを使ってトウモロコシの実と葉の色を変えよう。 ○見つけたすてきわざを全体で紹介し合い、技法を共有する。 ・私は、５班のかた紙を繰り返して、何個もりんごをすったところをまねしてみたいと思いました。 ○話し合いでわかった新しい技を試したり取り入れたりして、パワーアップさせ、よりよい作品にする。 ・同じ型紙で何度も刷る技を使って、ももの木を刷ろう。 ・初めに切り抜かれた型で刷って、その後にずらして切り抜いた型で刷れば、影みたいに刷れてかっこいいな。 ○パワーアップできたかを振り返る。 ○班のメンバーと協力して片付けを行う。	国語 **「ことばで絵をつたえよう」** 三角、四角、丸など、さまざまな様子の形の伝え方を知る。 生活科 **「花ややさいのおおきくなるひみつはっけん」** 野菜を育てる過程で、調べ学習や観察をする。	参考作品を提示し、刷り方の技を考え、理解することで、版画に興味をもち、学習の見通しをもつ。 【評価】 スポンジや絵の具の使い方に慣れ、型紙をつくったり、つくった型紙を使って形を写したりする技法を理解する。 （知識・技能）

第二次 クラス製作 **てだて①③④⑤**	３．みかん祭りを盛りあげるための看板をデザインしよう！⑤ ○各班のつくった作品を振り返り、学級全体で一つのものをつくることを考える。 ・グループで協力できたから、今度はクラスで協力して頑張りたいな。 ○「道慈小の子たちに喜んでもらいたい」、「衣丘小の行事を盛りあげたい」という思いをもち、看板づくりをする気持ちを高める。 ・衣丘小学校でずっと育ててきたみかんだから、みかんを大切にする気持ちを看板で伝えたいな。 ・地域の方も見るかもしれないし、お世話になっている家族や地域の方にありがとうの気持ちが伝わればいいな。 ○デザインを考え、意見を出し合う。 ・今年もいっぱいみかんが実ったから、たくさんの型をつくって実を刷りたい。 ・みかんにいろんな形があるから、いろんな大きさや形、色のみかんを刷ろうかな。 ・真ん中にみかんまつりの文字を入れたらどう。 ４．みんなでつくろう、みかん祭り看板！⑥⑦ ○３・４時間目で気付いた形・色・配置の技や工夫を振り返り、型紙作成と刷りあげをする。 ○自分のこだわりや、友だちのよさを発表し合う。 ・みかんを刷るときに、いろんな型を用意したから、自分の作品をつくるときも、いろんな種類の型を用意したい。 ・色を何色も使って、一つの型でもカラフルにしたい。	**特別活動** **「みかん祭り」** みかんを収穫し、みかんにまつわる学習をする。 **図画工作科** **「わっかでへんしん」** はさみやセロハンテープを使い、飾りをつけて変身する。 **「まどからこんにちは」** はさみやカッターナイフを使って紙を切り、開閉する窓をつくる。	参考作品を提示し、刷り方の技を考え、理解することで、版画に興味をもち、学習の見通しをもつ。 【評価】 スポンジや絵の具の使い方に慣れ、型紙をつくったり、つくった型紙を使って形を写したりする技法を理解する。 （知識・技能）
第三次 個人製作 **てだて①④⑤**	５．すてきわざいっぱいのじまんの作品をすろう！⑧⑨ ○これまでの学習を振り返りどんな技があったか話す。 ○海の生き物について型紙で作品をつくることを知る。 ・これまで見つけてきたわざを全部試してみたいな。 ・色を全色使ってカラフルな版画にしよう。 ○画用紙いっぱいに刷り、作品をつくる。 ○自分のこだわりや、友だちのよさを発表し合う。 ６．鑑賞タイムで自分と友だちの作品のよさを見つけよう！⑩ ○友だちの作品を見て回り、よいところや工夫しているところを見つける。 ○学習用タブレット端末で写真を撮り、すてき印をつけ、お互いのよいところを伝え合う。 ○学び日記で、これまでの活動を振り返る。 ・みんなの作品からわざをたくさん見つけられたから、自分の作品にも試せたよ。 ・何度も刷って作品が作れたから、どんどん上手にできるようになったな。 ・グループやクラスでつくったことがなかったから、みんなでやれて楽しかったな。	**図画工作科** **「読書感想画～ふうせんくじら～」** 自分の作品をタブレット端末のカメラ機能で撮り、スタンプを押す。 **国語** **「うれしくなることばをあつめよう」** 共感的に友だちの話を受け止める言葉を使って話す。	版画に対する意欲をさらに高めるために、学校行事にかかわる場を設定する。 【評価】 横断幕づくりに興味をもち、どんなデザインにしようかイメージを膨らませている。（学びにむかう力・人間性）

３　抽出児童について

	実態	教員の願い
A	・発想力が豊かであり、図画工作科がとても好きである。 ・上手につくりたいという思いが強く、失敗しないように慎重に製作する一面がある。 ・丁寧すぎるがあまり、ぼかしたり重ねたりするような応用力に乏しいところがある。	・机間指導で頑張りや工夫を認め、豊かな発想を周りの子に広めたり、B や周りの友だちに自信がつく声をかけたりしてほしい。 ・グループやクラス作品に最大限アイディアをいかす経験をすることで、個人製作でも自分らしく多様な表現に挑戦してほしい。

B	・絵に対し苦手意識があり、発想に乏しく、手が止まる。 ・不器用であり、はさみを使って細かい模様をつけたり、きれいな曲線をつけたりしながら切ることが苦手である。 ・自信がなく、作品のよいところを見つけたり伝えたりすることに抵抗を感じる。	・グループの活動で、友だちと一緒に製作することで、いきいきと活動してほしい。 ・苦手意識をもつ絵の単元であるが、繰り返し刷る活動を経て、見方や発想を広げながら、徐々に自信をもってのびのびと活動してほしい。

４　実践と考察

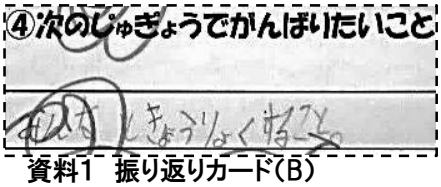
（１）いかす・自信をつける学び合い（グループ・クラスの共同製作）〈てだて①〉

①「いろいろなすり方のわざを見つけよう」（第１時）グループ製作

第１時では、グループ製作のテーマ「スマイルやさいランド」を製作するにあたり、どんな野菜やフルーツがあるかをグループで出し合う時間を設けた。ここでは、発想が豊かなＡと、表現の仕方がわからず手が止まるＢが同じグループになるように編成を工夫した。普段は、あまり意見を言う様子が見られない Ｂ だが、野菜やフルーツを考えるという身近な素材を扱ったことで、「パイナップル」「スイカ」「モモ」「きのこ」など多くの意見を言っていた。Ａは、グループみんなの意見を取りまとめながらホワイトボードに記録していく様子が見られた。グループでかかわり合うことで、意見がもてないＢも、刷りたい野菜やフルーツの意見をもつことができた。

②「グループできょう力！スマイルやさいランドのかた紙をつくろう」（第２時）グループ製作

第２時では、グループで型紙の形や色、配置などを相談しながら、型紙を製作した。Ａは、黙々と型紙をつくり、スイカの模様を切り抜く、難易度の高い型紙を製作していた。その一方で、Ｂは、型紙を切る作業になった途端、「上手く切れるかわからない。」と、自信を喪失している様子であった。Ｂ に対し、「どんな野菜やフルーツを思い浮かべたかな。」と問うと、「モモ」や「きのこ」をあげた。教員から、①下書きをしてもよいこと、②刷るときはグループみんなでつくった型紙をどれも使ってもよいことを助言すると、「やってみる。」と安心して作業に移った。初めに、モモの型紙をつくったＢに、どうやってつくったのかを聞くと、「ハートを裏返してつくった。」と話した。「なるほど。よく考えて上手につくれたね。２枚目も挑戦する？」と聞くと、「うん。」と話した。その後は、腕組みしながらじっくり考え込む様子が見られた。型紙の製作では、グループでどんな野菜やフルーツを刷るかをあまり相談する様子はなく、各々が刷りたいものをつくっている様子であったため、グループで集まって製作するというよさはあまりいかせなかった。一方で、Ｂ の振り返りでは、「次の授業で頑張りたいこと」について、「みんなときょう力すること。」と振り返りカード（**資料1**）に記述し、話を聞くと「友だちの型紙を使ってもいいから、みんなのを使って協力してつくりたい。」と話した。次時にむけて、グループの仲間とともにとりくむ前向きな気持ちがもてた。



資料1　振り返りカード(B)

③「グループできょう力！スマイルやさいランドをすってみよう」（第３時）グループ製作

第３時では、実際に絵の具とスポンジを使って刷る製作を行った。ＡとＢのグループは、まずメンバー全員で「サクランボ」を刷った。一人ずつスポンジを回しながら、実の赤と、茎と葉の緑を刷り分けていた。Ａ・Ｂ ともに協力して作業を行うことができた。その後は、ナス、バナナなどを刷りすすめ、Ｂは紙を押さえる役割だけであったが、上手に刷ることができた際には、「うぉー！」と歓声をあげたり、全員で拍手したりする様子が見られた。Ｂだけでは難しいことも、仲間と協力することでつくる喜びを味わうことができた（**資料2**）。

資料2　仲間とともに製作する姿

④「みかんまつりをもりあげるおうだんまくのデザインを考えよう」（第５時）クラス製作

第５時では、クラスで共同する作品のデザインを考えた。クラス作品の題材を「みかん祭り」と紹介すると、学校を代表する行事に対し、どの児童もとても嬉しそうな様子であった。どんな気持ちでつくりたいかを問うと、「みかん祭りを盛りあげたい。」「全校のみんなに喜んでほしい。」「道慈小（交流学校）の子にも見てほしい。」などの意見があげられた。そのため、クラス製作の大テーマを「みかんまつりをもりあげるおうだんまくをつくろう」とした。

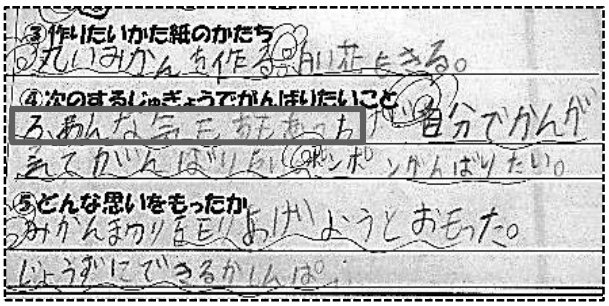
次に、具体的なイメージをもつために、初めに、黒板に大きな横断幕の枠組を書き、思いついたアイディアをつぎつぎに発表させた。その話し合いの様子が右の**資料3**である。全員で話し合う中で、「みかんをたくさん描きたい。」⇒「３０個のみかんを描きたい。」や、「文字を入れよう。」⇒「カラフルにしたい。」などと、思考が深まっていくことがわかる。B は、みかんの白い花を描きたいという思いをもち、発表した。発想が豊かなＡは、「楽しめたり、笑顔になったりするイメージがあるから、にじの絵を描きたい。」と意見を発表した。本学級の級訓が「にじ」だったこともあり、多くの児童が「賛成！」「よいアイディアだね。」などと共感する意見が多く集まった。

その後、ワークシートでデザイン画を描いた際は、B も友だちの意見を取り入れて、「丸いみかんをつくる。」「白い花を切る。」とつくりたい型紙の形の意見をもつことができた（**資料4**）。振り返りからも、「自分でかんがえてがんばりたい。」「ポンポンがんばりたい。」と記述し、思いをもって製作に向き合う気持ちがもてた。一方で、「上手にできるか心配。」と記述し、完全に不安な気持ちを払拭することはできなかった（**資料5**）。クラス製作の計画では、Ｂはさまざまな意見をもとに自ら考え、つくりたいイメージがもつことができた。また、Ａは、自分のアイディアが友だちに共感され、作品にいかされる経験ができ、さらなる製作意欲につながった（**資料6**）。

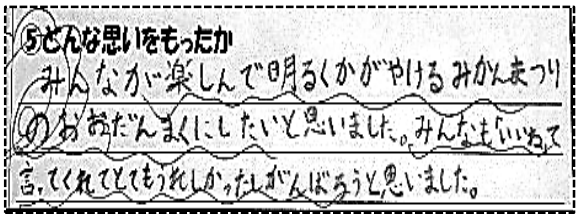
C：みかんをたくさん描きたいな。
D：C さんに付け足しで、クラスの人数分の３０個のみかんを描いたらどう。
E：いいね。先生も入れて３１個にしよう。
B：ぼくは、白い花を描きたいな。
F：みかんまつりの文字を入れようよ。
G：カラフルな文字の色にしたいな。
A：私は、級訓も「にじ」だし、楽しめたり、笑顔になったりするイメージがあるから、にじの絵を描きたいな。
他の児童：おー！／なるほど！
H：賛成！雨が上がってにじが出たらうれしい気持ちになるしね。
I：よいアイディアだね。ぼくもそうしよう。

資料3　児童の話し合いの一部

資料4　計画カード（上が A、下が B）


③作りたいかた紙のかたち
丸いみかんを作る。白い花をきる。
④次のするじゅぎょうでがんばりたいこと
ろあんな気もちもっち自分でかんがえてがんばりたいポンポンがんばりたい。
⑤どんな思いをもったか
みかんまつりを盛りあげようとおもった。
じょうずにできるかしんぱい。

資料5　振り返りカード（B）

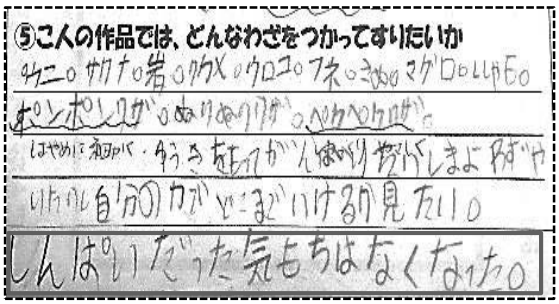

⑤どんな思いをもったか
みんなが楽しんで明るくかがやけるみかんまつりのおおだんまくにしたいと思いました。みんなもいいねって言ってくれてとてもうれしかったしがんばろうと思いました。

資料6　振り返りカード（A）

⑤「みかんまつりをもりあげるおうだんまくをつくろう」（第６・７時）クラス製作

第６・７時では、クラスで出し合ったアイディアをもとに、型紙の製作と刷る活動を行った。Bは、自分が切ったみかんの型紙を使って刷りたいという思いをもった。オレンジ色をつくるために、近くの児童に「オレンジって赤と黄色だっけ？」と自ら質問し、友だちと一緒に赤色と黄色を混ぜ、みかんを刷っていた。次に、友だちがつくった文字の型を使い、「り」の文字を水色で刷った。この際、近くの友だちの水色を分けてもらうなど、自分から話しかけに行く様子があった。続いて、自分が刷りたいと計画した、「白い花」に挑戦した。小さい型紙であったからか、初めは上手に刷ることができなかったが、それを見かねた友だちが型紙をおさえて一緒に刷っていた（**資料7**）。そして、同じ型紙を使い、自分の力で４回繰り返して花を刷ることができた。振り返りでも、「さいしょ、〇〇さん（児童J）がもってくれて、あとから自分の力でできてうれしかった。」と答えている。徐々にではあるが、友だちの影響を受けて、自分の力で活動することが増えたといえる。また、「勇気をもってがんばりたいし、まよわずがんばりたいし、自分の力がどこまでいけるか見たい。しんぱいだった気もちはなくなった。」と振り返りに記述し、口頭でも発表した（**資料8**）。

資料7　友だちと協力して刷るB・J



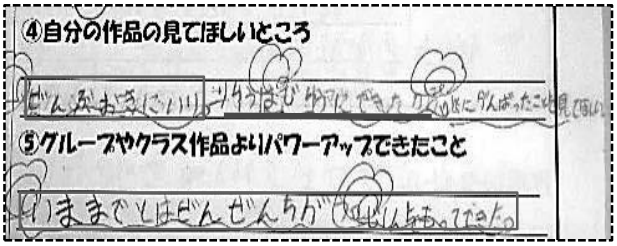
資料8　振り返りカード（B）

グループ製作で自信がもてない場面があったBだが、クラス製作では、仲間と協力して刷る活動を通して、自分らしく前向きに個人製作にとりくむ意欲を高めることができた。この姿からも、グループ製作から徐々に自信をつけ、楽しんで刷ろうとする姿が見て取れる。

⑥「海の生き物ランド～すてきわざいっぱいの作品をつくろう～」（第８・９時）個人製作

第８・９時では、これまでの学びをいかして、海の生き物をテーマに個人作品を製作した。グループやクラスでの製作を通して、試行錯誤しながら刷ることに慣れてきたBは、個人製作では不安げな表情は見られなかった。計画カードを描きながら、「マグロ」「サメ」「ウニ」の三種類の生き物を刷ると自分で決めた。刷り始めにかかる時間も短く、時間いっぱいまでとりくむ姿が見られた。また、余白が多くて悩んでいる友だちに対し、自分の作品を見せながら「ぼくは、岩とかわかめとかを描いたよ。もう少し白いところにほかの魚をすったら？」と自分からアドバイスをする姿も見られた（**資料9**）。これは、１年時から見られることのなかった、自分の作品に自信をもち、自分の表現を広げようとする姿勢である。振り返りでは、「ぜんぶお気に入り。今までとはぜんぜんちがう。じしんをもってできた。」と記述している（**資料10**）。これらの言動からも、これまでの段階をふんだ製作活動を通して、自信を取り戻し、楽しくのびのびと表現する喜びを味わうことができたといえる。

資料9　友だちに助言をするB



資料10　振り返りカード（B）

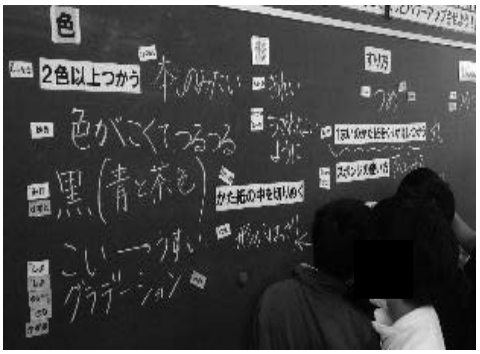
（２）よいところを見つける中間鑑賞〈てだて②〉

①「すてきわざはっけん名人になってもっとパワーアップさせよう！」（第４時）グループ製作

「スマイルやさいランド」の製作途中で行った「ミニ鑑賞タイム」は、互いの班の作品を見合い、１人につき３枚の付箋（すてき印）を貼る中で、よいところを見つける活動である。活動の前に、鑑賞する４つのポイント（「色」「形」「刷り方」「その他」）を伝え、技法に着目できるように配慮した。A と B のいるグループは前半に見る側、後半は見られる側であった。

資料11　スイカの型紙を見せながら刷り方を説明する A

前半は、A は「さくらんぼすごい！」「実はしっかりめで、葉は軽く刷れていていいね。」「かきが３色使えていて本物みたい！」などと、思った言葉を素直に出しながら、すてき印を貼る様子が見られた。B も、「おれ、きのこが好き。」「大根とか白が好き。黄緑色とか。」とつぶやいたり、厚く絵の具を使って刷っているという意見を聞いて「確かにいいね。超ぼこぼこしてる。」と共感したりして、すすんで貼る様子が見られた。



資料12　挑戦するわざを決める B

後半は、相手グループの多くの児童が、A が刷ったスイカに着目し、素敵なところを伝えていた。「どうやって刷ったの。」という質問に対し、つくった型紙を見せながら説明する姿が見られた（**資料11**）。B が刷ったきのこにも友だち一人からすてき印をつけてもらうことができた。「おれのきのこにも貼ってもらえた！」と満足げに教員に話しかける B の様子からも、すてき印が貼られることにより、自分の作品が認められ、自己肯定感が味わえたことがうかがえる。終末では、よりよくしたい技法を選ぶ時間を設けた。板書に自分のネームプレートを貼ることで、次時で新しい技法を使ってよりよくしようという気持ちがもてた（**資料12**）。

その後、B はパワーアップさせる製作時間で、自分でつくったきのこの型紙を選び、2 色を選んで、型紙の回りに着色しながら自ら版画を楽しんだ。第３時までは、「スポンジでただ色をつけるもの」という認識であったが、友だちと一緒に製作する中で、やっと「型紙を使って描く」という版画の概念を理解することができた。これは、友だちの刷り方を見たり、鑑賞してよさを見つけたりすることで、本人なりに試行錯誤した結果であると考える。これより、中間鑑賞で友だちの作品の多様性を認め合う活動を通して、自分では気付けなかった技法や見方を知り、その後の製作にいかすことができたといえる。

（３）すてきわざの蓄積〈てだて③〉

①「すてきわざいっぱいの海の生き物ランドをつくろう」（第８・９時）個人製作

個人製作の中で、児童らはすてきわざの掲示（**資料13**）を見ながら、自信たっぷりの作品をつくろうとする姿が見られた。B は、海の生き物「ウニ」を刷る際、藍色一色で刷ろうとしていた。教員が「どの技を試してみる？」と声をかけると、「２色以上使うわざ」を使い、赤や黄色、オレンジや青などのカラフルなウニに仕上げていた。また、「型紙を何度も繰り返して使うわざ」を使い、マグロやサメを２匹ずつ刷ることができた。A は、「新しくわざを見つけたい」という思いをもち、掲示を眺めながら考

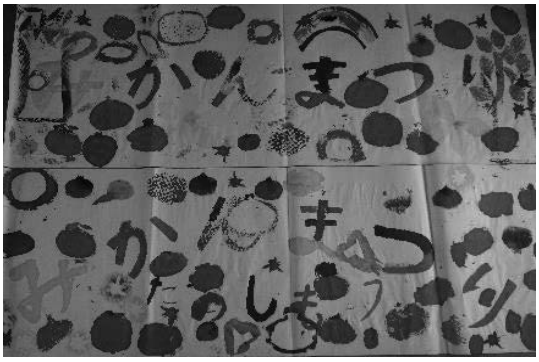
資料13　すてきわざの蓄積（教室）

える様子が見られた。これらの様子から、製作をしながら振り返りができるため、多様な技法を使い製作する際に活用しやすかったといえる。

（４）学校行事にかかわる機会〈てだて④〉

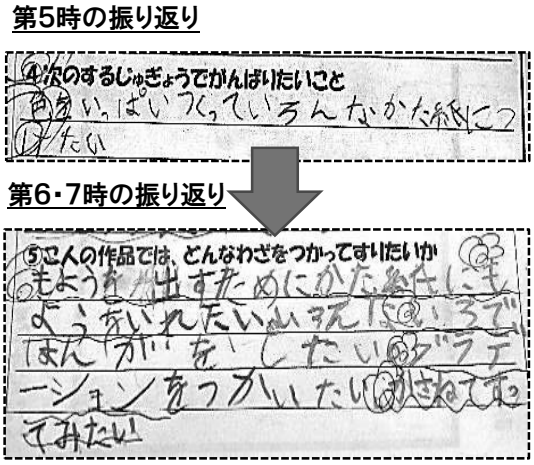
①「みかんまつりをもりあげるおうだんまくをつくろう」（第６・７時）クラス製作

第６・７時では、Ｐ.３で前述した通り、クラスで型紙の製作と刷る活動を行った。「みかん祭り」を２週間後に控えていたこともあり、自然な流れでテーマに向き合うことができた。昨年は入学したばかりで、何もわからず上級生に教えてもらうばかりであった児童にとって、図画工作を通して「みかん祭り」にかかわれる喜びは大きく、「楽しみ。」「頑張るぞ。」と話す様子があった。



資料14　完成した2つの横断幕

製作では、どの児童も自分が切った型紙を使い、こだわりをもってつくる様子が見られた（**資料14**）。「この色がいいね。」「でこぼこが上手に出せてるね。」「こうしてみたら。」など、認めたり提案したりする姿が見られた。刷る作業にも慣れ、準備や片付けを手際よく行うこともでき、その点でも自信になった。作業後は、「刷る活動をみんなで楽しんでできた。」「満足できる横断幕にできた。」と感じる児童が多かった。



資料15　振り返りカードによるＡの変容

個人製作にむけた振り返りで、Ａは「かた紙にももようを入れたい。いろんな色ではんがをしたい。グラデーションをつかいたい。かさねてすってみたい。」と記述した。第５時に比べ、さまざまな技法について着眼することができた。友だちとかかわりながら製作する中で、よりよい作品を生み出そうとする主体性を高め、技法や見方を広げたことがわかる。また、これまで丁寧につくろうとするがあまり、応用的な表現が見られなかったＡが、重ねる表現を取り入れようとする姿から、試行錯誤する中で、きれいさばかりではなく自分なりの表現を見つけ、のびのびと表現する姿がはぐくまれたといえる（**資料15**）。

（５）異学年児童・教員からの評価〈てだて⑤〉

①「みかんまつりおうだんまくをみんなに見てもらおう」クラス製作

横断幕の製作を終え、ただ飾って、感想カードを置いておくのではなく、「全校の人にちゃんと見てほしい。」という意見があがった。そこで、児童と話し合いをし、「どんな思いで製作したか」「これまでの学習過程」「感想カードを次の個人製作で活用したい思い」を全校放送で知らせることにした。オーディションをし、代表５名に選ばれたＡは、休み時間に原稿を考え、熱心に発表の練習をしていた。放送で話すときの児童らはとてもいきいきとしており、放送が終わった後、満面の笑みで両手をあげ、宣伝できた達成感を感じている様子であった。みかん祭りにむけて思いをもち、作品に対して思い入れをもって製作や宣伝をすることができた。作品展示をした後は、休み時間毎に、感想ボックスを覗きに行く児童がいた。普段大人しいＢは、１年生の教室へ行き「ぜひ見てください。」とお願いしたり、書いてくれた児童に「書いてくれてありがとうございました。」とお礼を言ったりする様子が見られた。放送や宣伝の効果もあったのか、１週間の掲示で、計７２枚の感想カードが集まり、児童らは嬉しそうに１枚１枚確認していた。

②「すてきわざいっぱいのじまんの作品をすりあげよう！」（第８・９時）個人製作

A は、３年生からの「みかんをもっとカラフルにするとよい」というのびのびポイントをもとに、個人作品では「イルカを濃い色から薄い色まで、何色も使って刷りたい。」と考えを発表した。また、６年生「重ねて刷ることで色の変化が楽しめるところがよい」というほめほめポイントをもとに、イルカを２匹重ねて刷ることができた。色の濃淡を楽しんだり、重ねて刷ったりする応用力が高まった。

B は、１年生からの「白いところ（余白）がなくてよいね」というほめほめポイントを見て、「ぼくも画用紙いっぱいに刷るぞ。」と意気込みを述べていた。その他も、これまでに蓄積したわざをもとにして、カラフルなウニやヒトデをいくつも刷り、自信がもてる作品をつくりあげることができた。

A・B ともに、異学年からの意見も取り入れ、製作にのぞむ姿が見られたことから、多様な考え方に関心を寄せ、新しい表現方法を模索する主体性が高まったといえる（**資料16･17**）。

資料16　個人製作の完成作品(A)
題名　「海の生きものあつまれ
～夜のパーティーはじまるよ～」

資料17　個人製作の完成作品(B)
題名　「海のにぎやかなまつり」

５　成果と課題

（１）研究の成果

【仮説Ⅰ】について

段階的に仲間とかかわり合い、試行錯誤しながら新しい技法や見方を知り、表現の多様性を互いに認め合うことで、自信をもって活動し、表現する楽しさを実感できるだろう。

絵画の中でも刷り直しができるという特徴がある版画を題材とした理由は、何度も失敗していく中で、徐々に自分らしさを見つけ、自信をもって活動できると考えたためである。グループでの製作を第一に設定したことで、仲間と協力して、体験しながら「スマイルやさいランド」をつくることができた。また、段階的に仲間とかかわり、何度も刷る経験をしたことで、個人製作でもこれまで学習してきたことを活用して、満足いく作品がつくれた。

A は、初めは自分の型紙製作に熱中し、友だちとかかわる様子はあまり見られなかった。しかし、グループ製作（中間発表）での「スイカ」や、クラス製作の計画「にじ」を多くの友だちから認められ、さらに自信がもてたおかげで、友だちとのかかわりが増え、相手のよいところを詳しく伝えたり、B に対しても前向きな声をかけたりすることが増えた。教員の願いであった、豊かな発想を周りの子に広め、自信がつく声をかける姿が発揮できたといえよう。

B は、初めは自信がもてない様子であったが、グループみんなで製作することで、友だちとかかわりながら一生懸命に製作しようとする姿があった。クラスで１つの作品「みかん祭りの横断

幕」をつくる活動では、協力しながら少しずつ自信をもってとりくめるようになった。また、P.４の**資料10**に「自由にできたから」と B の振り返りにもある通り、学んだ表現方法をいかして、満足いく個人作品をのびのびとつくりあげることができた。

このことから、〈てだて①〉～〈てだて③〉は有効であったといえる。

【仮説Ⅱ】について

子どもが好きなテーマにもとづき学校行事に携わる経験をし、学級の壁を越えて評価されることで、自分らしくよりよい作品をつくろうとする主体性を育むことができるだろう。

A・B ともに、「みかん祭り」にかかわることができる喜びを感じていた。また、作品のデザインを考える際も、意見をつなげて深めたり、賛同したりするなど、盛んに話し合い活動をすすめることができた。これより、身近な好きなものにもとづく題材設定は、児童の製作意欲を高めたといえる。

A は、異学年からの評価をもとにして、型紙への模様入れ、いろんな色で刷る、グラデーション、重ねて刷るなど、多様な技法を取り入れ、表現の幅が広がった。これより、よりよい作品へレベルアップさせようとする主体性を育むことができたといえる。

B も、異学年からの評価をもとにして、一つの型紙を何度も使い、色を変えて刷る工夫をして、画用紙いっぱいに刷ることができた。また、自分の作品を紹介しながら友だちに助言する姿も見られた。これより、学んだ技法をいかして、自分らしく表現する主体性を育むことができたといえる。

このことから、〈てだて④〉・〈てだて⑤〉は有効であったといえる。

（２）今後の課題

グループ・クラス・個人製作と、段階をふんで刷る活動をしたことにより、体験的に学ぶことができた。しかし、型紙製作に時間がかかり、単元計画の予定よりも１時間多く活動することになった。また、相互鑑賞は、多様な発想を学び、新たな視点に気付く場となったが、コロナ禍でのとりくみという点でまだ改善の余地があると思われる。また、よいところだけではなく、B が抱いていた「不安」「困り感」を話し合う時間を取ってもよかったのではないかと考える。「スポンジでただ色を付けるもの」「切り取られた型紙の上を刷る」と誤って認識していた B にとっては、アイディア以前に「認知する力」が乏しいと気付かされた。版画の概念の定着のための話し合い活動など、別のとりくみも工夫したい。

クラス作品を製作する活動では、全校児童が見ることができるところで作品が展示され、多くの評価が得られたことにより、気付かなかった新たな発想を学ぶことができた。放送で、みかん祭りにむけた意気込みや思いを話す場面はあったが、自分たちの「作品」に対するこだわりや思いを伝える場がなかった。児童が作品に対して、こだわった部分を一緒に紹介する掲示があればよかった。また、感想カードだけではなく、どの学年も作品を持ち寄り、互いの作品を鑑賞しながら感想を伝え合えるような場ができると、より自分の表現したものが明確に相手に伝わり、対話的活動が盛んになると考える。１月に学校行事を通して、「みのりの作品展」があり、全校児童の作品が体育館に集められる。この場を利用し、他学年と鑑賞交流ができれば、より意欲につながるのかもしれない。今後の研究の課題としたい。